ふぁんたじぃは甘くない。

前髪後退

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふぁんたじぃは甘くない。

【Ｎコード】
Ｎ７９２８Ｌ

【作者名】
前髪後退

【あらすじ】
ある日僕は死んだ。何てことはない事故で呆気なく、あっさり死んだ。まぁそれはいいのだ。死んだことは覆らない。正し、輪廻転生をさせられるとは死んで尚、思わなかった。

プロローグと言うなの振り返りは短めに。

異世界の剣と魔法の物語。そんな世界にあこがれを抱いたことがある。転生や召喚、はたまた落ちこぼれの成り上がり。仲間と切磋琢磨し、ヒロインと恋に落ち、敵を倒して救い手となる。そんなありふれた王道。ありふれた物語。清く正しく美しい。

――――けれど現実は汚く悪しく醜い。王族貴族による選民思考に圧政、戦争、裏切り、悪しきが蔓延り、正義がくじかれる。そんな世界の中で僕は、もがき、苦しみ、必死に生きる。汚い中で、だからこそ尊く美しいモノを得て、守るために。

僕が私になった、甘さを覚悟に変えたとき、代償を払い力を得たとき。私の戦いが始まる。

なんて、思ったときもありました。

第一話。別れと出会い。

「や、だからさ、中二病は冷めた男以外は重度軽度はあれど割と発症すると思うのよ！！　自分が特別だと認識したいわけですなっ」

「あー、誰かに自分を認めてほしいわけですね」

「そうとも言うが、なんかこう、変わりたいというか……何でお前はそんなに冷めてんですかっ」

ギャンギャンと吼える、短く刈り上げられた茶髪の少年と、それを適当にあしらう黒髪が少し長い、線の細い少年が交差点で信号待ちをしている。夕暮れ時の道は学生や買い物帰りの主婦が多く、二人の周りにも数人信号待ちをしていた。黒髪の少年は思春期特有の夢見がちな友との青春逆る会話が些か恥ずかしかったが無視するわけにもいかず、うんざりしながら話を続ける。

「僕は冷めてるわけではないよ、熱しにくいだけで。て言うか藤見君はなんでそんなに燃えてるの？」

「お前は低温やけどしそうなほど冷めてると思うけどな！！　いやー、やっぱり高校生って大体一度しかないじゃん？　恋に部活に友情に、そこそこ勉強なんてして、良い思い出にしたいんだよ。そうするにはさ、夢見がちでも何でも良いから元気でいないとって思うんだよ」

「へーん……。藤見君は今……と言うか日々が楽しい？」

「おー、楽しいぜっ。これで彼女が居たら文句なしなんだけどなー。どうしたらモテるんだっ」

無駄に熱くて常にハイテンションなのを少し控えればいいんじゃないかと、少年は思ったが、それを言うとややこしいことになるのが目に見えているので適当に流し辺りを見回す。

割と大きな交差点なのに、すぐそばに小さな公園がある安全策が微妙なところ。当然親が付き添って遊ばせているのだがどうなのだろう。不意にボールが道路に転がり運悪く車が来たりして人身事故になったりしそうで「危ない！！」よなぁ。

何て考えていると、不意に友人である藤見の声と甲高いブレーキ音、つんざく悲鳴が聞こえ、目を前に向ける。

突き飛ばされたのか、尻餅をついて反対側の歩道に居る少年と、突き飛ばしたことで硬直し、更に目前に迫ったトラックという暴力に硬直した友人。

やれやれ、これだから未来を視る人間は……。なんて、ドロップキックをかまして友人を突き飛ばした後に考え、たいがい僕も馬鹿だよなぁ。何て考えながら、

血と肉と骨が潰れる音を最後に聞き、少年は意識を失った。

◆◆◆

そこはとある小屋。腹の膨らんだ銀髪碧眼のうら若い女性が冷や汗を流していた。糸に鋏、沢山の清潔な布に人肌の温度の湯。今ここで、たった一人で、新たな生命を産もうとしている。息は乱れ、痛みはもはや苦しみにしか感じず、冷や汗は止まりそうにない。早く異物を産み落としてしまいたい。息を深く吸い、両手を握りしめ、

全身全霊で叫んだ。

「ふっ、あああぁぁぁぁぁああぁああ！！」

瞬間、開放感を覚え、漸く産めたのだと思い一瞬気を失い、赤子の泣き声で我に返る。

「……はっ。いけないいけない。シャンとしなきゃ」

タオルを何枚も重ねた所にいる、まだ繋がった我が子を女性は見た。小さく赤い体、銀灰色の産毛、本当に猿のような顔。股を見ればどうやら男の子のようだ。自分の髪色と同じ事に笑みをこぼし、てきぱきとやるべき事をやる。へその緒を切り、湯で羊水や血を落とし、しっかり拭くときれいな布で包む。抱きかかえた体は軽く、本当に脆弱で、とても愛おしく思える。

「うふふ。初めまして私の赤ちゃん。私はアウローラ・ウィンディ。ママですよー」

にこにこにこにこ、緩みきった表情で赤子の頬をつつく。柔らかくプニプニした頬。小さい手に指をやるとキュッと握られる。ニコニコがニヤニヤに変わった。

「えへ、えへへ。可愛い可愛い可愛いなー。他の人の赤ちゃんは猿みたいだったのに、自分の子だと天使に思えるのね」

額に瞼に頬にキスを落とす。ちょっと舐めちゃったりもする。ついでに頬を吸ってみたり。親馬鹿だった。というより馬鹿だった。そうしていると赤子の瞼が少し開かれ、眼が合った。角度によっては黒に見える濃い茶色の瞳が綺麗だ。

「うふふ。綺麗な茶色い瞳……少し猫眼ね。よし、貴方の名前はレイン・ウィンディよ。宜しくねレイン」

ほんの少し強くなった指を握る力に、気に入ったんだなと想い、もう一度額にキスを落とした。

第二話。生きること甘くない。

レイン・ウィンディがそれに気づいたのは三歳の頃。唐突に、自分が違う者だった知った。いや、思い出したとか、気が付いたと言った方が正しいかもしれない。確かに彼は生きている。が、確実に死んだはずだった。友達を助けた代わりに、何トンもの重量が何十キロの速さで彼を粉々に、グチャグチャに破壊したはずなのである。

そして今、とても小さな矮躯。高い声。銀灰色の髪。何より、母が居る。これはどう言うことか。所謂生まれ変わり――――輪廻転生と言った事が起こったのだろうか。小さな手を眺め、ギュッと握る。刺さる爪が、確かに此処に在ると感じる。それはとても、とても喜ばしいことだ。ゼロからのスタート。親が居て、家がある。素晴らしい、とレインは想う。体全部使って喜びを表したい。体が子供な為か精神が幼くなっている気がするが、気にしない。今は名実ともに子供なのである。ズバッと両手をあげ万歳三唱。晴れやかな気分だ。

「あらあら、レー君どうしたの？　だっこして欲しいの？」

「お母さん、だっこー」

背後から声が聞こえ、振り返るとニコニコした母――――アウローラ・ウィンディがレインに手を向ける。そこに小走りで駆けよりピョンッと飛びつく。自分の髪より明るい銀髪がふわっと揺れ、何だか甘い匂いがする。レインが前世を思い出す前も好きなにおいに心が安らぐ。穏やかな碧眼はずっと眺めていたいくらい綺麗だ。母が美人だと何だか得な気がする。

ニコニコしたアウローラは額に頬に唇に（！？）キスを落としてくるが、それがこそばゆくて、照れ臭くてレインは少し顔を赤くして笑ってしまう。

「うふふ、レー君顔真っ赤で可愛いいー」

「うぅ、お母さんの方がかわいーよ？」

キャーキャー言いながらアウローラはレインに頬擦りし小躍りする。馬鹿親子だった。レインとアウローラの毎日はこんな、見ている方が恥ずかしい日々だった。

◆◆◆

「希少種？」

「えぇ、希少種。ウィンディの一族は希少なのよ。男となれば尚更ね」

へー。とレインはよくわかっていないような返事をした。頭の中では思考が高速で始まっているが、しかし如何せん情報が少ない。食後のホットミルクをアウローラの膝の上で飲みながら質問をする。

「何で希少種なの？」

「んー……容姿、いや繁殖能力と異能？とでも言えるかしら。レー君に解りやすく言うとね、レー君にはお父さんがいないでしょ？神様は普通、お父さんとお母さんの所に赤ちゃんを連れてきてく

れるけど、ウィンディは特別に、お母さんだけの家にも赤ちゃんを連れてきてくれるの。勿論、お父さんとお母さんが居るところにも連れてきてくれるけどね」

狙う理由は様々だけどね。そう言って、そう言ったアウローラは酷く寂しそうに笑った。

「だからね、レー君。あなたには沢山の危機と苦難があるわ。沢山の人が、欲に目がくらんだ人が、人を人と思わない人が、遠くない未来に貴方を得ようとするわ。だから貴方は人を見る眼と、誰にも負けない力を得る必要がある。魔王よりも強く、英雄より正しくね」

「んん、よくわかんない。とにかく強くなればいいの？」

「ふふ、少し難しかったわね。強く正しく、自分のために生きないとだめよってお話よ」

「わかったー。僕、お母さんも守れるくらい強くなるよ！！」

「うふふ、レー君は頼もしいわね。大好きよ」

ギュギュー、と痛いくらい抱きしめられながら、異世界転生はライトノベルほど甘くないなとレインは思った。

希少種の話をした翌日からアウローラの師事による特訓が始まった。成長に邪魔を来さない程度の軽い筋力トレーニングと模擬戦闘。そして一番重要な事が命を奪うことだった。アウローラが森に罠を仕掛け兎などの小動物を生け捕りにし、足を縛って、レインに止め

を刺させる。時に刺殺、時に撲殺、時に絞殺、時に毒殺……様々な方法で殺し、様々な生物を殺した。殺すことで生きる、そう実感するには余り余るほど殺した。生きるためである。そして生かすためである。レインに殺させる時のアウローラの痛々しい眼が、強くかまれた唇が、心に刺さるのだ。初めて小動物を殺したときよりも深く。

今はまだ、殺さないと守れない程度の強さしかない。けれど必ず、殺さなくても生きていけるほどの強さを得ようと益々精を出すのだった。

第三話。邂逅

厄介な者を見つけてしまった。

レイン・ウィンディは細長い枝で倒れた人のような者をツンツン突っつき、反応を見る。ぴくぴくと、獣の耳と尻尾が動く。どうやら生きているようだ。黒い全身タイツに身を包み込んだソイツは獣の耳と猫のような尻尾を持ち、髪の毛は茶色で肩で切りそろえられている。その髪は小枝やら葉などで装飾されており、古きよき時代の生け花を彷彿とさせる。よく燃えそうだ。

「……さて、帰るか」

「ちょいっとまちなよ少年。それは余りにもあんまりじゃないかな？」

全身タイツの怪しい人物がガバッと足に抱き付き、懇願するかのような眼でレインを見る。明るい茶色の瞳はやんちゃそうな印象を抱かせる。容姿も整っており、レインよりは数才上のように思える。16か18位だろうか。こっちに来てからのレインはアウローラしか眼にしておらず、前の世界では幼く見られる人種だったため外見で判断する事が難しい。

「怪しい格好をした痴女は相手にしては駄目だと母の教えでして」

「うっ。た、確かに怪しい格好はしているけど痴女じゃないから！！」

「でも怪しい格好してるのでお近づきになりたくないです。離してください変態が移るっ」

「移ってたまるかそんなもの！！　君は可愛い見た目してる癖に口が悪いね！！」

「貴女は主に態度が悪いですけどね」

ムキャー！！　と野生じみた奇声を発する獣耳の少女から三歩距離をとる。すると少女が立ち上がったので全身がよく見えた。身長はレインより高く１６０センチ位。全体的に細い体は華奢な雰囲気ではなく、しなやかな筋肉を付けた獣のようである。しかし、どうにも全身黒タイツなため変態にしか見えない。そう、ざっと全身を眺めたのに気付いた少女は口角をあげ、ニヤニヤと笑った。

「おや？　おやおや何だい少年。そんなにじろじろ見て。変態だの痴女だの言っておきながら私の身体で劣情を催したのかい？　くふふ。まったく、少年と言うのは気難しいね。好きな子にはついついつっけんどんな態度をとりたがる年頃なのかな？」

「だまれ貧乳」

「貴様は全貧乳を敵にした！！」

今までで一番気合いが入ったツッコミだった。耳と尻尾がピンと立ち、シャーフシャーと威嚇している。気にしていたらしい身体的特徴を言ってしまったレインは少々申し訳ないなと思ってフォローを入れようと思う。自分ではどうしようもないことを言われるのは酷く傷つくものだ。レインの眼差しは敬虔な使徒の如く慈愛に満ちて。

「うん、きっとこれから育つよ。希望を捨ててはいけない。諦めた

ら成長は止まってしまうんだよ」

「やめて！！　変な期待持たせないで！！　そういわれ続けて早二年っ、微塵もそんな気配ないんだからっ」

「……何も泣かなくても」

さめざめと泣く少女に、レインは何となく面倒くさくなってきた。もう帰って良いかな？　適当に相手してあげたし、そろそろ昼食の時間だ。母さんを待たせるのも悪い。

そう考えて、結局よく解らなかった少女に背を向けて家に向かう。話のネタが出来た、そんなことを考えながら。

◆

レイン・ウィンディとアウローラ・ウィンディの住む家は森の中心付近であり、川に比較的近いところにたっている。木造の平屋で二人で生活する分には割と余裕がある広さがあり、自給自足でも豊かに暮らしていける。町に向かうのは主にアウローラで、それも偶に、服や小麦粉、調味料を買いに行く程度だ。どこからその資金が出るかと言えば、森に生えている薬草等を売っているようである。要は広さがあり、蓄えがある。と言うことだ。

「おっかえりーレー君！！　今日も怪我してない？」

レインが玄関を開けるとアウローラが奥から出迎え、有無をいわさず抱擁し、全身に怪我がないか確認する。この森はそれほど大きな獣は生息しておらず、既にこの森一番の獣は狩っているのだが、子煩悩というか心配症というか、つい世話を妬きたがるのだ。

「ただいまお母さん。何時も言ってるけど、油断せずにしっかりやってるんだから大丈夫だよ」

ずいぶんと背が伸びたレインはアウローラに抱きつかれると胸に顔を埋める形になってしまうので、少しばかり照れてしまう。それでも心配してくれるのは嬉しいので素直に抱かれ、笑みを浮かべる。アウローラは傷が無いことを確認すると微笑み、額と頬、唇にキスをすると不意に開きっぱなしの玄関を見た。より正確に言うなら、玄関に立つ全身黒タイツの獣耳の顔を赤くした少女を見た。

「……。レー君、彼女は誰？」

「変態で痴女な貧乳」

「こらっ、そんな人と関わったら駄目って言ったでしょ」

「うん、ごめんなさい」

「はい。良くできました。えーと、それで貧乳さんでしたっけ？帰っていただけます？　レー君の情緒教育に芳しくないので」

「あんたら親子は本当に言いたい放題だな！！　貧乳貧乳うるさいよっ」

「唾を飛ばさないで下さい。貧乳が移ってしまいますっ」

「あんたは知らないだろうけどこのやり取り二回目だよ！！　むしろあんたは積極的に移れ！！　無駄な母性出し過ぎなんだよ！！」

アウローラは変態からレインを護るように抱きしめ、少女はその覆しようがない事実の口撃に激怒する。この親にしてこの子あり。とはよく言ったものだと思う。似通った美しい容姿に言動、少女にとって二人は強敵だった。

「はぁ……。もう、何でも良いから、今日泊めて貰えないかな？　ちょっと森で迷っちゃって、出れそうにないの」

「ふっ、獣人が森で迷子ですか。それはとても皮肉でおもしろい冗談ですね」

「うぐっ。そ、そんないい笑顔で言われると倍傷つく……」

ニヤニヤと笑みを浮かべるアウローラに、引きつった笑みを浮かべる少女。レインは置いてけぼりにされた気がして、なんだか楽しくない。それにお腹も空いてきた。

「ねぇお母さん、どうする？　女の人だからお母さんに危害は加えないと思うよ？」

「うふふ。ありがとねレー君。私は貴女の方が危害を加えられそうで心配なのだけれどね」

アウローラはレインの細く長く、傷み一つ無いような髪に指を通し、少女を見る。眼がバッチリあった少女は一瞬呻き、恭しく頷く。

カタカタと指先がふるえ、選択を間違ったかもと、今更ながら思った。

（こ、恐すぎる。手を出せば殺す色目で見たら殺す誘惑しても殺すとか、ほ、本気なんだろうな）

少女は粘っこい唾を飲み込み、出来る限り友好的な笑みを浮かべる。今鏡を見たら大変可笑しな顔が見れただろう気がする。

「ごほん。え、えっと。一日だけだろうけど、宜しく。私の名前はミルシャ・リルム。ミルシャって呼んで欲しい」

「えぇ、宜しくミルシャ。私はアウル・フロイト。こちらは息子のレスト・フロイトよ」

「宜しくミルシャ。そろそろ変な顔やめたらどう？」

そんなに酷い顔なのだろうか。落ち込みつつも少し見てみたいミルシャだった。

◆◆◆

「それで、やっぱりミルシャは猫舌なの？」

昼食後、舌をこれでもかと出して手で風を当てているミルシャにレインが話しかける。初めて見る人、それも獣人ときて色々と興味が尽きない様子だ。ミルシャはそんな眼がキラキラしたレインに何だか感じる物があるが、何処までが鬼神の許容範囲か解らないので内心ビクビクしながら、

「うん。私だけじゃなくて獣人はだいたい猫舌だね。やっぱそこは

獣というか、舌が少し敏感なんだよね」

「へー。殆ど人みたいなのに変だね。尻尾とか耳も敏感なの？」

「そうでもないよ。手足みたいに触られたら分かるし、怪我したら痛いけど、それもやっぱり手足に怪我を負うのと同じ程度だね」

「……生やしてる意味有るの？」

「んー……生やしてるんじゃなくて消えないんだよ。耳とか尻尾とか、獣の一部はまんま生活の支えとか、武器になってるしね。そう言った理由から消えないんじゃないかな？　学者じゃないから詳しく解らないけどね」

それに可愛いでしょ？　とニヤリと笑い、先が白い茶色の細い尻尾を振るミルシャは確かに可愛いとレインは思った。ある趣向を持つ人にはたまらないだろう。怪しい人に捕まらないのを祈るばかりである。

「ふーん……不思議だね」

「私は貴方達が不思議だけどね。なんだってこんな森に住んでるの？」

「この森の守護者なのだ」

「わー嘘くさすぎていっそ信じちゃいそー」

あながち嘘じゃないんだけどなー。と困った笑みを浮かべつつ、

かといって本当のことは話せないので、話題転換する。お互いの年齢や好きな物、事、人。得意な魔法、苦手な魔法。殆どレインから話しかけたが話題は尽きることなく、その日は結局眠るまで賑やかな時間を過ごした。

そして翌日。別れの日。

「それではお二人共。お世話になりました」

礼を欠かさずしっかりとお辞儀をするミルシャに、レインとアウローラは少しばかり面食らう。一日過ごしただけだがこれほど殊勝な態度をとる人だとは思えなかった。ぽかんとしている間にミルシャは顔を上げていた。笑顔である。

「私、お二人のこと忘れませんから」

「そんな大袈裟な……」

「こら。そんなこと言わないの。忘れるってことはその人を殺すってことなのよ？　ミルシャに私達を殺させてあげないの」

めっ。と叱るアウローラにレインは素直に謝る。でもその言葉もやはり大袈裟だと思ったことは内緒にしておいた方がいいだろうと口を噤んだ。

「さようならミルシャ。今度は森に迷わないようにね」

「ふふん。もう大丈夫よ。今度は迷わないわ。それじゃ、グズグズ

してると別れづらくなるから此処でおしまい。さようなら！！」

小さく手を振り、玄関から出て行くミルシャ。耳と尻尾がピンと立ち、凛とした姿を最後に見せようとしているようで、レインは思わず、馬鹿だなぁと言い、つい、笑ってしまった。

「お母さん。ミルシャは無事迷子になると思う？」

「んー。しっかり着くんじゃないかしら？　あれでも獣人だものね。レー君、今日は忙しくなるわよ」

「やっぱり？　嫌だなー。どうせお母さん手伝ってくれないんでしょ？」

「うふふ。さぁ、どうかしら」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7928l/

ふぁんたじぃは甘くない。

2010年10月15日16時48分発行